

瀬底正賢さん

1929(昭和4)年2月10日生まれ
当時の本籍地 沖縄県
沖縄水産学校鉄血勤皇通信隊
第32軍司令部通信隊
沖縄



- 1944(昭和19)年10月10日 十・十空襲で沖縄県立水産学校も全焼
- 1945(昭和20)年2月初旬 中頭郡宜野湾村(なかがみぐんぎのわんそん)の農民道場へ移転
昼は石部隊(第62師団)の陣地構築、夜は電話の実戦訓練。

●1945(昭和20)年3月28日 閉校

見習い士官と下士官が通信隊を連れに来た。先生の交渉の結果、一度親元に帰って4月1日に第32軍司令部に行くよう命じられる。上級生は鉄血勤皇隊として北部へ向かう。山羊をつぶして分散会。

北部に避難していた家族に会いに走った。引きとめられたが、男子師範学校付属小学校訓導だった兄と一緒に、32軍司令部へ。

●1945(昭和20)年4月1日未明 首里の第32軍司令部通信隊に入隊(同日、米軍上陸)

監視所と壕内情報部とに分かれ、交替で任務に就く。敵の来襲状況、攻撃目標、艦船の状況等逐一報告。至近弾で電話線が断線するたび結線。監視所は最も危険な場所だが、うす暗い壕内にこもっているより気分がよかった
5月17日、水産通信隊から2名、初めての犠牲者が出る。

●1945(昭和20)年5月27日 南部撤退

重要書類、99式電話機等焼却して出発。下士官に命じられ、数個の柳行李を2人1組で運ぶ。大雨で重くなり、肩に食い込む。重要なものだからと言われたが、実は将校の衣類だと途中でわかり怒りが湧いた。(島外脱出に使うつもりだったのではないか。)

●翌午前4時頃 南風原(はえばる)陸軍病院壕着

この場所を死守せよとの命で、タコツボを掘って潜むが、戦車は那覇方面に通り過ぎた。

さらに南部へ出発するとき、看護の女学生が残った負傷兵に白い小さな袋を配っていた。負傷兵はみな、「ありがとうございます」と受け取っていた。それが毒だと知っていたと思うが、皆静かだった。

●1945(昭和20)年6月 摩文仁(まぶに)の壕

6月19日、数人の参謀が大本営に向けて小舟で出発するという。水産学校から5名が同行したが、全員不成功、戦死した模様。

6月20日、特攻中隊編成。水産隊は2組に分かれ、斬り込みに出た。自分の隊は砲撃で身動きが取れず退却、もう1組は玉砕。

●1945(昭和20)年6月21日 司令部壕が米軍戦車による馬乗り攻撃を受ける

重砲火攻撃の後、ガソリンが撒かれ壕内は一瞬にして火の海と化しパニック。続いて爆雷が投下され、壕が落盤。生き埋め。石の下敷きになり、動けない。助けを求めると、奥から来た兵隊が通りがかりに石をよけてくれたので自力で脱出。

かろうじて同級生の安否だけを確認。我に返って「軍務」、司令部へ行く。牛島中将に、「瀬底二等兵、垂坑道入口爆雷投下全員生き埋め報告致します」と報告。牛島中将は名前を聞き、手帳に書く様子。

下士官に入口を死守せよと命じられ歩いているうちに気を失った。目覚めると、すでに司令官は自決。壕に生き残っていた同級生2名と壕を出る。失明した開南学生も誘ったが、固辞し自決。

●摩文仁の海岸に出て、岩場に身を隠しながら生き延びる。

壕を捜して、具志頭出身の女性3人、夫婦、T1等兵、工業学校生の7人と合流し、しばらく一緒に生活。

7月下旬、摩文仁にいま掘りに行った帰り、地雷にあう。白い光と大音響と共に意識を失い負傷。T1等兵と民間人はここで死亡。この時の怪我がもとで、後に水産学校の同級生の1人も死亡。後に銃撃を受け、工業学生死亡。

- 1945(昭和20)年10月3日 投降、收容所で、病院に行くと言って別れた最後の同級生も帰らず。水産通信隊で生き残ったのはただ1人となった。

(取材日:2012年2月6日)